

平成26年度第2回墨田区図書館運営協議会会議録

1 日時 平成26年12月13日（土曜日）

午前10時～午後0時

2 場所 ひきふね図書館 会議室

3 出席者

会 長	永田 治樹	(筑波大学名誉教授)
副 会 長	河西 由美子	(玉川大学准教授)
委 員	西村 均	(墨田区立竪川中学校長)
委 員	細木 隆	(墨田区立第四吾嬬小学校長)
委 員	金子 キク子	(図書館ボランティア「くさぶえ」)
委 員	持田 由美子	(図書館ボランティア「ブックトークの会」)
委 員	小田垣 宏和	(墨田区ひきふね図書館パートナーズ)
委 員	北村 志麻	(墨田区ひきふね図書館パートナーズ)
委 員	戸島 敦子	(公募区民委員)
委 員	村山 厚子	(公募区民委員)

4 議事

(1) 今後の図書館サービスについて

(2) 墨田区子ども読書活動推進計画（第3次）について（中間報告）

5 会議録

倉松館長 あいさつと本日の議題について説明

議題

1 今後のサービスについて

2 墨田区子ども読書活動推進計画の中間報告

永田会長 第1番目の議題である「今後の図書館サービスについて」に入る。事務局に説明をお願いしたい。

倉松館長 利用者統計等に基づき、現在の墨田区の図書館の状況の説明をするので、その後、ご意見等をいただきたい。

南部主査 別紙「区内利用者登録統計の分析」に基づき、下記のとおり説明した。

1 人口と登録者の比較（世代ごとにおける登録者数など）

2 未登録者数

3 世代別登録者数と世代別年間貸出冊数

別紙「墨田区立図書館における分野別の個人貸出状況」のとおり説明した。

別紙「墨田区立図書館における分野別の蔵書数」のとおり説明した。

永田会長 この資料について何か質問は。

北村委員 この資料からは少し離れるが、貸出状況と蔵書の割合は選書する際に合わせようとしているのか。例えば家政学は多く借りられているので、その分野の本を増やそうというような方針はあるか。

田中緑図書館長 特に合わせようとはしていないが、出版点数の割合からすると文学系や家政学の料理本が多いので、それらを買っていくとやや費用が増えると思う。基本的には利用が多いからそこを厚くするという事はない。逆に利用が少ないところはある程度厚くしていかないと利用が増えないので、その辺りの分野を意識的に入れることは考えている。

小田垣委員 30代、40代の未登録者が多いが、パートナーズ企画でもビジネスマン向けにビジネス書の読書会や経営者向け企画をやっている。ターゲットは30代、40代が多くなるので、そこは図書館とリンクするのではないか。図書館としてもやはりここを増やしていきたいと考えていると捉えて良いか。

倉松館長 トータルでなるべく多くの方に利用していただきたいと考えている。特に30代、40代を中心に増やしていこうという意図はないが、利用率が低いということについて図書館側に改善すべき点があるのであれば、それは改善していかなければいけないと思っている。

北村委員 図書館のコンセプトとしてどこをやっていくのか。登録率をあげるべきなのか貸出冊数を増やすべきなのか。そういった図書館の基本的な考えや方針があれば教えてほしい。

倉松館長 区立図書館としては、区民の登録者数を増やし、多くの区民に利用してもらいたいと考えている。

永田会長 利用の世代別の数字は大変参考になる。実際の登録者で、年にそれぞれの人がどれくらい使っているかという統計は出るか。中学生が70%の登録をしているが実際に使っている生徒は少ない。大人もそうかもしれない。登録者率は29.1%と30%近い区民が登録しているが、実際図書館を使っている人たちは何パーセントなのか。もしかしたら10%以下かもしれない。そうなると図書館への認識は極めて低いということになる。日本の図書館の特徴は、そういう少数のヘビーユーザーによって頻繁に利用されていることである。これだと図書館は社会的な影響力を持ちにくい。諸外国では、社会への影響力を得るため、図書館の登録率や貸出利用に対してとても神経質である。また、図書館はさほど大きな予算は配布されていないが、資料予算というのは割と固まりとなっているので、財政が逼迫してくると一番削りやすいところでもある。この10年でも随分と削られたと思うが、それでますます利用率が下がっている。なので、やはり館長が言うように登録者を増や

す方向で、どうしたらそれができるかを考えることが根本的な問題である。

眞田主事 2013年度に墨田区立図書館を利用した人は、墨田区民の中の15.1%である。

小田垣委員 利用というのは貸出者か。来館者数の数字は出ないか。

倉松館長 来館者についてゲートを通った数はわかるが、正確な数はわからない。

永田会長 それなりの指標にはなる。

河西委員 ブックスタートをやっていると思うが、そのとき強制的に0歳児でもカードを作らせるということはしていないのか。

南部主査 そのようなことはしていない。本区のブックスタート事業は、3、4カ月健診時に向島、本所保健センターに図書館職員が出向き、本を渡してブックスタートについての宣伝をしている。その際、図書館利用を呼び掛けているが、その後、利用登録がされたかどうかの調査はしていない。

河西委員 そのとき記入してもらい、後日、赤ちゃんの分のカードを渡せば、実質的に0歳から6歳の登録率は大きくなる。現在は保護者が代わりに借りているところを実際に赤ちゃんのカードで借りて、実態に近い数値が取れる。ブックスタートをやる図書館の目的の一つは、本当はそれだと思う。登録率を乳幼児から伸ばしたいのなら、それをやらないのは大きなマイナスだ。せっかくブックスタート制度があるにも関わらず低いというのはやや問題。小学生の登録率が高いのは学校で図書館訪問等をしていて、そこで登録をしていたりするということがあるのではないか。

西村委員 登録率と貸出点数を合わせたグラフを見ると、0歳児から6歳児は大変なヘビーユーザーであることがわかる。登録者数を底上げするべきなので、ブックスタートも保健所だけでなく各図書館でもやるべき。子どもが図書館に慣れ親しんでいくことを進めるべきで3カ月健診で強制的にやるのはいいチャンスだが、次回はブックスタートを図書館で行う、と宣伝すれば、もう少し登録率が上がっていくのではないか。

永田会長 図書館に縁がなく、読書に多少疎遠な家庭を引き込む機会にはなると思う。そういうきっかけとしてブックスタートは良い。

河西委員 数年前に私が指導していた学生の卒論で、埼玉県のブックスタートをやる前とやった後の意識調査を、図書館と利用した保護者に聞くというものがあった。非常に特徴的だったのは体験後の意識が全部ポジティブに変わっていたこと。やる前は図書館の人もすごく後ろ向きで、赤ちゃんと保護者が図書館に来たら大変という意識があったが、やってみると今まで手の届かなかった層の人たちに本を届けることができ、図書館のトイレを改修しておむつシートを置いたり、子ども用の便座をつけたりすることもあった。一方保護者たちも、図書館は赤ちゃんを連れて行ってはいけないところで、うるさいから嫌がられるかと思っていたが、ブックスタートをやってくれたことによって赤ちゃんを遠慮なく連れていけることがわかった、

ということがあった。すでにブックスタートをやっているのに、これをいかに有効活用するかが重要と思う。

金子委員 先日おひぎで絵本を実際に行い、布の絵本を利用してパフォーマンスをしたが、その日に布の絵本を借りていった親御さんがいると後で聞いた。終わる度に図書館員の方が、今やったのはこの本です、と身近に見せて本も並べてその場で貸出もしているのに、やはりお子さんの登録ではなく保護者の登録が多いかなという感じはする。

村山委員 図書館の存在自体をまだまだ知らない人が多い気がする。近所の人と話していて図書館を当然知っているだろうと思っていたら、知らない、ということがあった。マンションの中に綺麗に収まっているので、近くを通ってもここが図書館ということがわからないのかもしれない。図書館に来れば何でも至れり尽くせりで、いつも感謝の気持ちで利用しているが、来るまでの動機づけ以前の情報の流れがうまくできると、もっと多くの人に来るのではないか。

細木委員 京成曳舟から学校に通勤しているが、ひきふね図書館がこんなに近いというのを初めて知った。学校としてはすごくお世話になっているが、図書館は魅力がある、というのがもっと伝わってくるといいのではないか。また、こういう統計はとてもありがたいが、これは墨田区の状況だと思う。これがいいのか悪いのかがあまりよくわからない。他区の状況はわからないか。

南部主査 他区の状況について、どこまでの資料を提供できるかわからないが、次の会議で必要な資料があれば提供できるように検討していく。

北村委員 登録率ということで今方針が進んでいるかと思うが、来館者数という指標はすごく大事だと思う。図書館の役割自体も変わってきており、本を借りるだけの場ではなく、来てもらえばいろいろな過ごし方がある。パートナーズのイベントで、入るときに登録者カードを見せてもらう企画があったが、「カードはあるが使っていない。本はここに来て読むから借りない」という人もいた。実際、図書館の駐輪場やキャレル席はいつも混んでいる。登録率も大事だが、登録率を上げるには来館者数を増やさないといけないのではないか。どうやって知らない人や来ていない人を呼び込んでいくかが重要になると思うので、来館者のデータもできれば見たい。

永田会長 登録者からパブリシティ（PR活動）の話になって、来館者の話に移った。パブリシティについては、この会でも前に出たが、今回また出た。そもそも図書館の存在がよくわかるようにしてほしいということである。すっきりした、わかりやすかつ品のあるデザインで、街中に、「こちらに図書館があります」というサインがほしい。欧米の街にはライブラリーという案内が必ずあるが、我が国には少ない。財政的な問題もあるとは思いますが、パブリシティの話題が再度出たので、もう一度考えてもらいたい。パブリシティがないと来館者は増えない。そして来館者について言えば、日本の図書館は1970年代以降、貸出型になり席を設けなくなった。

特別区のおおかたの図書館はその影響で本当に席が少ない。今は逆に滞在型とか街のコミュニティの中心にしようという動きになってきて盛り返してはいるが、まだ席は少ない。もう少し別の理由もあって、ひきふね図書館もその辺りはだいぶ苦労されたのではないか。

南部主査 開館当初一般の書架は、127席のキャレル席のみで、席が少ないとの利用者の声があった。その後、書架に椅子を30脚ほど追加した。また2階のプロジェクトコーナーがイベント等で使われないときには、座ってもらえるようにした。最近では、席が少ないというような意見は聞かなくなった。

永田会長 来館者の統計はわかるか。

白木主事 昨年度1年間でコミュニティ会館図書室含めた区内全館のゲート通過者は1,519,891人。ひきふね図書館だけだと昨年度1年間で530,493人。これは図書館ホームページに掲載している墨田区立図書館事業概要の数字である。

倉松館長 これはゲートを通った数であり、属性等はわからない。また、同一人が複数回出入りした場合もカウントされるので、注意が必要である。

永田会長 これは重要な数値だ。もっと真剣に数えようと思ったら1週間なり2週間なり数えてみるといい。そういうサンプルをとれば、だいたい1年分が推計できる。曜日によっても違うだろう。

河西委員 大学図書館でも今はだいぶ滞在型になり、資料を持ち込んで閲覧しながらレポートを書くことが増えている。ただそうすると、例えば東京女子大学等の例では、貸出冊数は増えていない。ゲート通過者の数は確かにとても増えているが、結局、中で読んでいる時間が長くなるので、比例して貸出冊数が増えるということはない。図書館の中でどういう活動をしているか、という質的な点をどう評価していくかについて、今後は考えていかなければいけない。

永田会長 今後電子図書館のようになっていくと、資料貸出の側面から言うと人は来なくなる。だが逆に図書館が居心地のいい場所になって、街の中心になれば人は増える。米国などで電子書籍サービスをしているところは、その辺りでだいたい相殺しているというのが現状だ。ひきふね図書館はボランティアの方々もたくさんいて、街の活性化に非常に役立っているので、その観点から来館者を増やしていくのは大変意味があることだと思う。そこはぜひ追求してもらいたい。では、そのためにどうしたらいいのか。ボランティア側の視点や、図書館としてどこまで許容できるか等、活動の中身について相互に話し合っていたきたい。

北村委員 現状はやはりボランティアなので、それぞれがやりたいことベースでやっている。もちろん図書館でやってほしいことや、やれることをやっているが、しっかりとした方針はない。先ほど言ったように小田垣さんとはビジネスマンを強化しようという話はあるが、トータルとして図書館・行政と、区民とがどう作っていく

のか、という考えは必要になってくると思う。

永田会長 30代、40代も少ないが、前回気になったが高齢者も意外と登録が少ない。

村山委員 墨田区は広いのに図書館が点々としかない。高齢者はアクセスが難しいのかな、という気がする。自転車ですぐ行ける人はいいのだろうけど。

河西委員 私もこの数値を見ると足の問題という気がする。読書習慣があって本当に自分で読書をしたい人は無理をしてでも行くだろうが、読書習慣がないのにわざわざ離れた図書館に行く理由はなかなかないのではないかな。

持田委員 アクセスの問題は、忙しい30代、40代にも当てはまると思う。図書館以外に、近くにもっと貸出や返却ができる拠点があればいいのではないかな。

北村委員 今は高齢者支援で認知症予防等、前段階の予防の動きが世の中にある。そこを図書館でやっていくというのも一つの方針になるのではないかな。本を読んでいる人は脳が活性化されるという話もある。

永田会長 そういった目的や趣旨を出した方が行政も受け止めやすいのではないかな。

倉松館長 近くになれば便利なのは当然であるが、限られた予算で、区政を運営していかなければならない中で、現在の図書館の区民の登録率が30%弱、実際の利用率が15%程度で図書館の数を増やすことは難しい。そういう意味からも図書館の発言権を増やすためには、もっと多くの方に利用していただく必要があると思う。

永田会長 現時点で切るとそういう言い方になる。だが逆に言うと、そういう需要を掘り起こして来なかったということも事実だ。

北村委員 卵が先か鶏が先かの理論のように、これは民間だったら先行投資するかどうかという話。利便性のある環境として登録率を上げるというのは民間だったら当然やること。行政だと実績・前例主義なので難しいのはわかるが、それを言うと議論が止まってしまう。

永田会長 行政も皆が納得できる目的があれば手をつけると思う。だからエンターテインメント向けの読書で利用の人口比率が15%、となると行政は手厚くできないのではないかな。そうではなくて区民の健康を守るためにとか、または赤ちゃんの話など、そういう話に組み合わせないと恐らく動けない。

倉松館長 先ほどの高齢者の話も、高齢者の呆け防止とか、図書館オンリーではなしに高齢者施策の一環として高齢者担当部署と協働して行うということは考えられるのではないかな。

河西委員 今被災地で移動図書館車が走っているが、あれは図書館がやっているのではなくて発展途上国の支援団体がやっている。だが、そういうところがやっているからこそ、図書館にはできないサービスもある。例えば雪の日に仮設住宅に行ってお茶を振舞って住民の話を聞くというのは、これは図書館がやろうと思ったら難しいが、民間だからこそできる。そういうふうに最初はタイアップで始めて、住民の

認知が得られたらそこに公的なお金を投入して継続的にやっていく、というやり方の方がいいのではないか。図書館ですべて実施するというのは、今の仕組みを考えるとなかなか難しいかもしれない。

倉松館長 先ほど返却するのが大変という話があったが、区民が地域に返却する場所を用意してここに返しておいてくれれば、まとめて誰かが図書館に持っていくとか、その際、図書館が何か手伝うというやり方で協力することは考えられるが、全部区側で、一から揃えていかなければとなるとコスト面等で難しい。区民はこういうことができるので、こういうことをやる。そして、この部分については図書館で協力してもらえないか、というふうになればやりやすいと考える。

永田会長 マイクロライブラリーと公共図書館の関係は、まだうまく確立できていない。マイクロライブラリーの欠点として、コンプリヘンシブ（包括的）にならないということがある。あくまでボランティア間の力量の範囲だけでしか展開できない。いろいろな本を包括的にある程度まとめて提供するというのは公的な力でしかできない。相互の間をうまく繋いでもらえるといい。今の話のようにマイクロライブラリーの人が公共図書館の本を借りて、それを皆で読み合ったり、あるいはその逆など、そういうことができるとマイクロライブラリーの人たちも世界が広がるし、公共図書館もそういった需要層を獲得できる。

倉松館長 先ほど移動図書館の話が出た。区側で車を買ってドライバーを雇って移動図書館をやるのは難しいが、ボランティアが行うにあたり、本を貸してほしい、という部分については団体貸出とかの制度を使って、毎回定期的に本の入れ替えをして貸すということは、可能ではないかと考える。

河西委員 北海道の恵庭市で、まちじゅう図書館をやっている。あそこはブックスタートで発展した本の街的な動きで、カフェや自営業の人たちが本を置こうとしていて、それに対して図書館が支援するというをやっている。墨田区は都市部で小オフィスがたくさんあると思うので、そういう動きがやりやすいのかもしれない。

永田会長 墨田区のこれまでのスタイルは、中央館を設けずにいくつかの地域にある程度の図書館を作っていくというものだが、これは財政的に維持するのが困難なスタイルでもある。図書館というのは一定のコンプリヘンシブ（包括的）な蔵書がないといけない。今のやり方をやっている限りは本の重複が増えていくので、運営が非常に難しいと思う。今はIT技術でどこに何の本があるかわかるので、ある程度固まった蔵書と、それからサービスポイントをたくさん作り、または電子的に流したりするという形ができる。その意味では大きな図書館を作って、地域のところに持っていけるような格好を作らないといけない。地域ごとに相当の規模の図書館をいくつも作っていたら、財政はかなりきつい。

倉松館長 それは感じているところである。それぞれ同じ本を1冊ずつとしても、5カ所あれば5カ所に置かなければいけない。

永田会長 それはかなりきつい。ただ、利用者をたくさん掴めば、それなりに財政的な措置は出てくると思う。あるいは理由をきちんと作って、子どもたちを育てる、高齢者のために、職業人を活発にさせる等、という話を積み上げていく他に方法はない。皆さんだいたい同じような気持ちを持っているので、いろいろ工夫をしていけたらいい。そして来館者を増やすためには、場が素敵にならないといけない。

小田垣委員 何か仕掛けがないと人は集まらない。我々が行っているイベント等がその一つに成り得ると思ってやっている。

持田委員 ホームページでの図書館絡みの案内がすごく少ない気がする。図書館絡みで何かやっているみたいだからホームページのどこかにないかと思って探す、ヒットしないことが結構ある。そういうのがもっとあるといい。区報はなかなか来ないが、ホームページなら簡単にアクセスできるし、あればいいと思うのだが。

小田垣委員 図書館ホームページのトップページのお知らせに、イベント情報は載せている。

持田委員 全部は網羅されていないと思う。ひきふね図書館で、学校絡みで何かイベントがあったと思って、どこで何をやっているかだけでも知りたいと思って調べても、アクセスできないことが結構多い。

南部主査 図書館主催のものは、区ホームページから図書館ホームページへのリンクをするように努めたい。検索ができないような状況であれば、原因を調査する。また、ひきふね図書館パートナーズでも、かなりいろいろと宣伝等をしていただいている。それは直接インターネット上で検索ができると思う。

持田委員 図書館主催とは限らないが、図書館が絡んでいるイベントだと思う。指導室主催の調べる学習の関連とか、場所は図書館ではないけれど実施する、みたいなものは載っていない。図書館でやっているものは、だいたい掲載されていると思うのだが。

南部主査 教育委員会指導室の主催のものなど、一般利用者に公開しているものとしていないものがあるので、関係各課との調整が必要になる。各課との調整がつけば、関連情報として提供していきたい。

永田会長 人を集めるという方法では、図書館のスペースを一般の人が使えるということはあるのか。会議室とか催し物とか。

倉松館長 図書館事業でないと利用はできない。集会室があるのは八広図書館だけである。

永田会長 会議室は埋まってしまっているのか。

南部主査 ひきふね図書館会議室は、内部の会議等で利用するためのものであり、貸し出せるような状況ではない。

永田会長 他の分館でも複合施設の中に入っているところとか、そういうのはないか。

南部主査 八広図書館には、和室と板の間とホールがあり、貸出施設になっている。

永田会長 都市型の図書館を考えると、ビジネスに関して会議室を貸して料金を取ったりすることもある。

倉松館長 図書館に限らず一般の公共施設については営利目的の貸出は禁止になっている。そこで何かイベントをやって集客してお金をとって行う、というのは、あくまでも講師謝礼の実費程度等であれば可能だが、集客して利益を上げようというものについては、一般の公共施設は条例で営利目的禁止になっている。

戸島委員 図書館は近くにたくさん増えた方がいいと私は考えていたのだが、今の話だと図書館をたくさん増やすよりも、中央図書館を作ってそこから貸出拠点を増やしていくということか。

永田会長 図書館の蔵書は、使い込むにはある程度の広がりがないといけない。小さい規模の図書館ばかりだと、例えば調べたい動物の話を調べようとしても、本が各館に散らばってしまっている場合、いちいち集めないといけない。そうすると利用者は、量が固まっていないと図書館に行って調査する気にはならない。日本の公共図書館の一番の弱点はそれで、どこへ行っても間尺に合わないところがある。だからある程度の規模の中央館があって、そことそれぞれの拠点、今ある地域の図書館のようなものがあればいい。さらに高齢者に対しては本を届けたり、電子で送ったりと、そういう傾向に今はなっている。

北村委員 今の墨田区の図書館は何を目的に行くかによる。小説を読みたくて行く分には問題ないが、何か調べ物をしようとしたときにすごく中途半端な蔵書しかない。学術書もいろいろな館に散らばっているので、体系的に何かを調べようとしたらまず無理。もちろん中央館的役割がたくさん持てればいいのだが、それは財政的に厳しいので、どこか1カ所にでも調べ物やレポート執筆で使える中央館的な施設があるべきだという話だと思う。結局、図書館をどう使うかによる。町医者と中央病院みたいな感じで、気軽に行くには町医者レベルの軽い図書館でよくて、しかしすごい重病だったら総合病院に行くように中央図書館に行きたい、みたいなイメージだ。

永田会長 今の公共図書館は、人口の半分くらいの人たちには、自分たちには役に立たないと思われている。小説くらい自分で買うという話になってしまっているのだと思う。

北村委員 小説レベルの文学書は買えばいいという人がすごく多い。アマゾンもあるし30代、40代が来ないのはその辺りだと思う。永田先生の言うような役割を考えたときに、調べ物をする研究施設に準ずるような役割を持たせないと生き残っていくのは難しいと思う。一般市民だと3千円とか4千円の専門書はそうそう買えないので、それらが図書館にあって共有できるとありがたい。私もビジネス書をよく借りるが洋書とかはすごく高い。3千円くらいする。それらを置いておいて皆で共有して使うというやり方が、税金の使い方としていいとは思っている。

戸島委員 それらを利用する人たちは30代、40代なのか。そういう専門的なもの

を求めて図書館に来る人の利用年代はどの辺りなのかは気になる。例えば大学には専門書がたくさんあるし、大学生は自分の大学図書館に行く。それ以外で、そういう自分の専門書やビジネス書を求める人たちはどの程度いるのか。

永田会長 大学に属しているのは、一定の年代の半数と、限られた人たちだけで、多くの人にとって大学図書館はあまり使うことができない。自分が大学に属していたからわからなかったが離れてみると本当に使えない。では、どこへ行くか。いきなり国立国会図書館へ行くというわけにはいかない。となると公共図書館へ行くことになるが、しかし自分の職業的な調べものをするのに近くの図書館ではあまり役に立たないというのが正直なところだろう。せめて大学の教養程度の本でも近くの公共図書館にあれば、自分で調査し勉強している人たちにとっては大変うれしいことだと思う。

北村委員 それも卵が先か鶏が先かの話で、今図書館にないから利用されていないという現状がある。私は対象として労働人口は全員入ると思う。7千万人の働いている人たちは、何か調査やマーケティングをするときに図書館で調べ物をするべきだと思うが、今は施設も設備も整っていないし一般的に周知もされていないので使われてない。対象を考えれば人口の半数以上は入ると思う。

河西委員 墨田区はせっかく調べる学習コンクールにも参加をしているので、小中学校で基本を学んだ人たちが大学生、社会人になって、地元の図書館を使おうと思った際に、何も使えないということになるのは少し残念。やはり調べ物にも対応できる図書館機能みたいなところがこれからはもっと大事なかなと思う。

村山委員 図書館の機能として、区には蔵書がないが、他のところから取り寄せできるというのがある。ここの図書館はそれをととても親切にやってくれるので、図書館に来て目の前に書架があってそこから本を自分で自由に取り出せるということではできないが、少し時間がかかっても取り寄せてはくれるので、ある程度それで解決することはあると思う。

永田会長 今、墨田区の図書館で、墨田区以外の図書の検索もできるか。

田中緑図書館長 図書館にあるOPAC等では、区内の蔵書しか検索はできない。ただ職員等に話してもらえれば検索をかけて、それをお知らせすることはできる。

永田会長 職員等に話してもらえれば、というのが大きな壁となっている。なぜ職員に頼まず自分で、例えば東京都の中にある本や日本にある本が検索できないのか。

田中緑図書館長 インターネット用端末があるので、インターネットを使ってもらえれば見ることはできる。

永田会長 インターネットを使うことをきちんと利用者に知ってもらうことが大切。公共図書館は自館の所蔵資料のサービスが中心だが、区民は別に図書館にある本を読みに来るわけではない。自分の知りたいものを探したいし読みたい本を手に取りたい。今では人々の方が先行していて、まずはインターネットで調べて、それがた

またま近くの図書館にあるので読むか、というように逆転している。図書館が知の十分な倉庫になっていない。ごく一部分しかないという位置づけになっている。だから村山さんが言うように相互協力をやってくれるのはとても助かるのでぜひやってもらいたいが、公共図書館は仕切りのようなものができている。そこが大きな問題だと思う。その枠をはずすために、図書館が図書館の利用に関するリテラシーを支援する必要があると思う。

戸島委員 私は江東区在勤で、江東区の図書館と墨田区の図書館の2つを利用しているが、読みたい本があって江東区に行ったら所蔵がない。では予約して下さいと言ったら、あなたは在住者でないのでできない。江東区は在住者ならできるが在勤者は認めていない、と言われた。いつも横川を利用しているので、墨田区はどうなっているかと聞いたら、墨田区は在住者だけでなく在勤者でも予約可能と言われたので、墨田区の方が進んでいると思った。ただ図書館にないものを予約するためには図書館に行って紙に書かないといけない。それでもやはり、墨田区の方が進んでいるなどと思う。後、持田さんが言われた最寄り貸出・返却をできるようにしていくという話で、何か具体的なイメージがあるか。

持田委員 すぐ近くにビッグシップという本所の地域プラザがある。そこのカウンターで予約本を貸出・返却ができたならとても便利だなと思う。

戸島委員 図書館という蔵書のある施設を増やすのではなく、郵便物をいろいろなコンビニでやりとりできるようなのと同じで、図書館で予約したものをそこで受け取れたり、返却できたりするようにしていくということか。私は市川で教員をやっていたことがあって、市川は面白いことをやっていた。学校の児童図書室の隣に市民図書室が併設してある。そこは市民図書室だから大人が読むような本も置いてあったが、もちろん子どももそこで読める。学校の施設ならば親も行くので、そういうのも一つの手段かなと思う。

永田会長 今後の図書館サービスに関して登録者を増やしていく、あるいは来館者を増やしていく、その中で図書館の役割をどのようにしていくか等、いろいろな話が出た。次の第2の議題に入る前に、今後の図書館サービスについて何か特に言いたいことはあるか。

戸島委員 ひきふね図書館のこどもとしょじつの閉館時間は6時。これでは大人が児童書を手にとれる時間が少ない。来館者を増やすという意味でも、こちらと同じにしてほしい。また横川コミュニティでは、子ども用のパソコンには椅子があるが、大人用のパソコンには椅子がない。私は非常に腰が痛いので、大人の方にも椅子を用意してほしい。また子ども用のパソコンで入力しようとする、キーボードでなくてタッチ形式である。普通のキーボードも使えるようにしてほしい。

永田会長 開館時間の問題は、利用者の生活パターンとある程度合わせなければいけないので、図書館の方もそれはいつも考えていることだと思う。いろいろな利用者

がいたので、それぞれに優しいような施設というのを考えなければいけない。

南部主査 ひきふね図書館では、こどもとしょしつにも、タッチ形式だけでなく、キーボード形式のパソコンがあり、椅子もある。横川コミュニティ会館の状況については、横川の館長に確認し、本日の意見を伝える。

永田会長 墨田区の図書館は断然女性の利用者が多い。人口は男女そんなに墨田区は変わらないので、もう少し男性も取り込みたい。小田垣さんあたりが一所懸命されているユーザーの広がりを増やそうという動きだと思うが、それは選書や蔵書にかかっている。先ほど利用者の動向以外の原理原則を持って選書をしているという心強い話があったが、そういう意味では少しターゲットを決めて、小田垣さんたちの動きに連動させて考えてもらえるといい。ブックスタートの話、学校の子どもの話、高齢者の話、それから小田垣さんたちの話といくつか出た。いくつかの年代でより多くの登録者を増やしていこうということが考えられると思うので、その辺りを考えてもらえると私は大変ありがたい。

戸島委員 選書に関して、「朗読って楽しい」という全3巻の本がある。予約しようと思ったら1巻と2巻はあるが3巻は蔵書していなかった。何で3巻目を省いたのか。揃っているものは揃えておいてほしい。

南部主査 原則として、シリーズのものは、シリーズで揃えており、漏れがあれば購入する。

永田会長 次に、2番目の議題に入る。

南部主査 墨田区子ども読書活動推進計画第3次（中間報告）について、以下のとおり説明した。

- 1 これまでの経緯
- 2 計画策定の背景
- 3 第3次計画策定
- 4 子どもの読書活動のための方策

永田会長 ブックスタートは、保健所が中心になってしまうということか。

南部主査 ブックスタートは、3、4カ月健診時に保健センターから場所の提供を受けて、図書館が実施している。保健センターでは、健診がメインとなるので、あまり場所もなく、時間的にも十分に取れない。本来的には、保健センターの職員とも連携し、本事業の意義を共有したうえで実施すべきであると思うが、現状では、図書館の職員がその時間に保健センターに行き、本を渡して少しだけブックスタートの意義を説明して終わっている。

河西委員 待ち時間はないのか。

南部主査 多少あるが、スペース等が限られていて、待合で読み聞かせ等ができる状況ではない。

永田会長 スペイン（カタロニア）で、母親は子どもが生まれる前から読書をし、か

つ子どもが生まれたら読書や絵本を見せることはとてもいいことである、と医者に講演してもらったという話を聞いた。医師にも協力してもらったらいい。

西村委員 母親学級に乗り込んでいけばいい。今は父親学級もある。

小田垣委員 むしろ図書館で健診してもらえばいいのではないか。

南部主査 子ども読書活動推進計画は、墨田区では、図書館が中心になって策定をしているが、総合的体系的に子どもの読書活動の環境整備を目指して作られているものである。したがって、保健センター、学校、子育て支援等関係各課が協力しなければならない。その点で、関係者への啓発も重要であり、どのように啓発をしていくか、課題である。家庭地域等における子ども読書活動推進の取り組みの一つとして、ボランティアの育成に力を入れてきた。ブックトークボランティア「ブックトークの会」が平成26年4月に「子どもの読書活動優秀実践団体」の文部科学大臣表彰を受けた。次に、学校における子ども読書活動の推進で、教育委員会指導室主催で実施している「図書館を使った調べる学習コンクール」で、年々参加人数も応募数も増えており、受賞も増えている。この事業でも、ボランティアの皆さんにご協力をいただいている。

河西委員 何年生から何年生までが参加しているのか。

南部主査 小学校1年生から中学校3年生までである。

持田委員 図書館と学校の連携という点で、学校図書館で公共図書館の本の貸し借りができると全然違う。子どもは放課後、わざわざ地域の図書館に行く時間がない。システムは入っているので、同じカードで全部貸出が統一できるはず。職員が半日程度行っているなら、週1回、その時間だけでもいい。また、学校における子どもの読書活動の推進で、先生方が図書館を授業でどう使っているかわからない。実際、国語・社会・理科等で、どのように資料を使って授業を組み立てていけばいいのかわからない。教育委員会の何年次研修とかでも、図書館の研修が入っていない。文科省で図書館を使う授業を活性化するように言われても、先生たちがその方法を全然伝達されていないという現状があるので、この辺りが厚くなっていくと利用が増えるかなと思う。

永田会長 大変面白い。最初の方の可能性はあるか。

南部主査 システム的には、各学校図書館の端末で公共図書館の資料を検索できる。また、学校図書館で公共図書館の本を貸出すことはシステム的には可能である。

西村委員 私とか細木先生みたいな図書館部の部員の教師は、自分で図書館部をやりたいと言って来ているので研修は必要ないが、一般の先生方であまり図書館を使わないでやっているような方たちに対して、ぜひ研修をやってほしい。初任者研修や若手研修で今3年次まで研修があるので、その中で少なくとも1回はそういうことに触れていく。行うのは教育委員会でもなくても、一般のボランティアの方でもいい。またはある程度図書館利用に長けた教員が指導を行うなりしてもいい。

河西委員 先月宮崎県の学校図書館研修で100人くらいの先生に調べる学習のワークショップをやった。そのときは宮崎県立図書館が全面的に企画をしてテーマ図書を集めてくれた。各学年、テーマで調べたい場合、1テーマ20冊くらいあればグループで分けて、それらを先生方がどう使って授業を作るか、ということを考えるいいきっかけになる。本当は先生方だけでなく、学校司書の方と一緒にやるといい。そうすると先生は図書の使い方がわかり、司書はどういうふうに図書を提供したらいいのかがわかる。ただ、どこの自治体もやはり縦割りで教育委員会の中の担当部署が違っているとされてなかなか実現できないが、可能であれば校内研修でやると一番効果がある。先生方は次に図書を集めるときに図書館にどう依頼したらいいかというノウハウがわかるので、次からは自分で組み立てができるようになる。そういう具体的な手法を研修していくのがとても大事だと思う。

倉松館長 私どもとしては、学校サイドからぜひ学校教員向けにそういう研修をやってくれという声を上げてもらえれば、研修に協力することはできる。

細木委員 初任者から3年次までの研修は教育委員会にはあるが、図書館の研修というのはあまり聞いたことがない。今実際に求められているのは自分で考えて調べること。例えば、国語の単元で勉強したことに関して興味を持てることが他にもあるのではというときに、本がたくさん並んでいないと子どもたちは調べられない。そのとき図書館と連携しないと、子どもたちの意欲が落ちていってしまうのではないかと思う。

戸島委員 関連の本がどれだけあるかについて図書館はすぐに答えてくれるので、そういうシステムがあるということを教員が知るのが大事。例えば社会科のこの単位にはこういう関連本がある、というようなリストは一部あるのではないか。

南部主査 教科単元に寄与するということになる、図書館側に指導要領等の理解が必要になってくる。先生方と相談しながら、図書館側も学んでいく必要がある。

河西委員 実際に本を手にとらないとわからない。子どもたちに良かれと思って選んだものの中に、調べてみるとページ数や目次や索引がない本がある。実際に先生方と一緒に使うと、司書の人も、良さそうに見えたけど調べるには駄目だ、ということがわかるので現物の図書を目の前にして研修することはすごく大事。図書館側はブックリストやパスファインダーを先生に渡しているのに使ってくれないと言うが、先生側からするとリストを渡されただけではどう授業を作っていいかわからないというミスマッチもある。そこを踏み込んで、授業作りの中でどう図書を運用するかまでやらないといけない。もちろんベテランで優秀な先生は図書館にお願いすればすぐできると思うが、普通の先生は多分そこまでは考えが及ばないと思う。

西村委員 学校司書を平成27年度から配置するというのは努力目標で、これはいつまで経っても努力目標だ。配置されなくて図書室に鍵がかかっている中学校がほとんどである。昼休みと放課後の図書委員会のいる時間だけ開けて後は閉めておくこ

とになっているので、司書の配置は墨田区としては独自でもいいのでぜひやってもらえると助かる。また子ども読書活動を推進するために、今年うちの学校でビブリオバトルをやったら非常に有効だった。3年生を対象に文化祭のステージ上でビブリオバトルをやって、全校生徒に向けて話をさせて、それを投票するというのをやった。そうしたら子どもたちは喜んで、卒業前にもう一度やりたいと。実際に客の反応を見ながら喋れるようにもなっている。それなのでビブリオバトルは中学生ならかなり可能性がある。うちだけでなく吾嬭立花中でも墨田中でも今年やっている。賞状3枚ほどの用意でいいので図書館でビブリオバトル墨田区大会をやってもらえるといいなと思う。

北村委員 パートナーズで可能だと思う。

西村委員 ありがたい。場所はうちの学校を提供する。多分1学期に1回くらいはできるし、そうすると数少ない金額と手間で中学生の不読率は相当減ると思う。

河西委員 本に興味のない子どもの反応はどうだったか。

西村委員 皆の前に出たら無理矢理にも喋らされる。中学生用に3分間でやっているが相当上手。この間やった際は、出だしが「この本の主人公ってぶすなんです」という紹介の仕方、非常に楽しかった。ブックトークよりもビブリオバトルは誰でもできるゲーム性がある。

河西委員 できれば賞状だけでなく、他の人が10冊借りるところを20冊借りられるような図書館利用の特典があるといい。あるいはティーンズコーナーを優先的に使えるとか、何か役割ができるとか、そういうのがあるといい。

戸島委員 今、墨田区は学校司書が1人もいないのか。

南部主査 墨田区では、現在学校司書はいない。

倉松館長 現在は、図書館の職員が、週に1回、半日程度行っている。

西村委員 あまり利用しない学校が多い。半日来てもらっても授業があるし、放課後の1時間程度は話をしたり手伝ってもらったりするが、6時間目まであれば大抵の教師はもう教室に行っている、なかなか対応はできない。

戸島委員 中野区や江東区は独自に学校司書を週に1、2回程度派遣している。東京都全体の学校司書の普及率はどれくらいか。

南部主査 今、手元にデータがないのでわからない。

戸島委員 学校側がボランティアを利用して、本の整理をしてもらっているということはあるか。

南部主査 ある。

西村委員 司書資格を持っている人がボランティアをやってくれていることもある。

倉松館長 議会からも意見があった。教育委員会としては、来年度、小学校の図書館を週2回開けるための予算要求をしている。中学校については図書館職員が2回行くことでの対応を考えている。

北村委員 策定案の到達すべき数値目標の延べというのは、5年という意味で良いか。
南部主査 年度ごとで、1年間である。

北村委員 目標数値はまだ決めていないということで良いか。

南部主査 そのとおりである。

永田会長 学校図書館が開いてないとすると、開ける時間を書いた方がいいかもしれない。

河西委員 司書教諭との連携も大事。もし司書教諭が時間軽減を受けていて空き時間があるならば、その時間を使って少し協議をするという。

永田会長 その他、何か第3次計画について意見は。

西村委員 学校図書の選書に関して、今回、オリナスの近くの産業会館で新刊図書の展示を行い、そこに図書委員会を連れて行って自分たちで選ばせた。錦糸町だけでなく例えば曳舟はイトーヨーカドーがあるし、図書館流通センター等の業者に依頼をして、子どもたちが直接手に取って選書できるような機会を増やしていただけるとありがたい。

持田委員 業者によっては会議室等にまとめて本を持ってきてくれるところもあると思うので、聞いてみるといいのではないか。

南部主査 児童・生徒が選書するというのであれば、各学校長の判断になる。もしそのような要望があれば、業平にもブックセンターがあるのでそちらを紹介することはできる。桜堤中学校の先生方とも一度、一緒に行って選書したことがある。

永田会長 先ほどの持田委員の話で、システム的には学校から公共図書館の本を借りられるとあったが、これが行われていないのは学校側に抵抗があるのか。

南部主査 理由の一つには、子どもたちからのリクエストを受けつけるだけの体制が整っていないことがある。実際に両国小学校等では、ボランティア等の協力で、子どもからのリクエストで学校に本がなければ、公共図書館にある本を提供することもある。

永田会長 司書教諭や学校司書の指導の下にそれは可能ということか。

南部主査 そのとおりである。

戸島委員 図書の時間、子どもたちは一斉に学校図書室に行くので、パソコンを使って図書館の本が借りられることを担任が知っていれば、担任が対応してくれると思う。

南部主査 先生方の協力は、重要である。

永田会長 いくつも提案があり議論も進んだ。これにて閉会とする。